

川崎の歴史と文化にふれる 川崎宿めぐり

川崎宿のなりたち

川崎宿は、東海道五十三次のうち日本橋から二つ目の宿場です。徳川幕府が慶長6年(1601)に東海道を制定した後、距離が長かった品川・神奈川両宿(5里)の継立(公用旅行者の伝馬人足を宿民が負担する輸送制度)の負担が過重となったため、宿場が追加され、川崎宿は元和9年(1623)に起立しました。

川崎宿は、のちに京口土居(現在の小川町バス停付近)から江戸口土居(現在の六郷橋付近)までの約1.5kmで、小土呂・砂子・新宿・久根崎の4か村で構成。新宿には、交通機能を司る問屋場、助郷会所、高札場、田中本陣などの施設が集中していました。当初は寒村でしたが、付役として幕府から百両が交付されて、田中仮本陣と旅籠等が建てられました。

その後、旅籠は各所に建てられ、多摩川河畔に近い久根崎には、奈良茶飯で名高い万年(屋)、ハゼ料理が自慢の新田屋、会津屋など茶屋、旅籠が大きな店舗をかまえ、大変活況を呈しました。万年(屋)の脇には、寛文3年(1663)造立の川崎大師平間寺の方向を示す道標「従是大師江之道(これより弘法大師への道)」(現在は同寺境内に保存)がありました。

宿財政を支えた六郷の渡し

幕府は慶長5年(1600)多摩川に六郷大橋を架しましたが、度々の洪水で破損修復を繰り返し、貞享5年(1688)の洪水で流失すると、それ以降は渡船となりました。

渡船は江戸町人の請負となりましたが、川崎宿の財政



が困窮するなか、下本陣の当主で名主の田中休愚が尽力し、宝永6年(1709)以降、川崎宿が渡船を運営しました。渡船は、武士など公用旅行者は無賃でしたが、一般庶民は料金を支払うので、この収入が川崎宿の財政を潤し、宿場経営に役立ちました。

刻まれたあしあと

元禄7年(1694)5月、俳聖松尾芭蕉は、江戸を後に故郷伊賀に帰る際、宿場はずれの京口で、見送ってきた弟子達との別れを惜しんで「麦の穂を たよりにつかむ 別れかな」と句を詠みました。芭蕉はその年の秋、大阪で帰らぬ人となりました。

享保14年(1729)、現在のベトナムから贈られた象は江戸に向かい、途中で川崎宿に1泊しました。到着の日、街道筋には牛馬を十町以上離すこと、犬猫はつないでおくこと、寺院の鳴り物は象が驚くので中止すること、見物人は決して騒がないことなど、注意のお触れが出されましたが、当日は見物人で大いに賑わいました。

文化10年(1813)、厄年を迎えた徳川11代将軍家斉の川崎大師平間寺参詣以降、江戸を中心に庶民の間に厄除け大師信仰が広まり、川崎宿は賑わいを見せました。今は、残念ながら当時の面影はありません。しかし古文書や社に残る石造物などが古(いにしえ)の川崎宿を伝えています。